第 61 回 閑谷学校の言葉

前回（第 60 回）の冒頭で閑谷学校と津田永忠について記しました。私はこのような優れた施設、人物に感動し、かねてからの私の拙い趣味である建物模型作りの対象として今回はこの閑谷学校を選びました。小型模型ですので製作精度が低く公表するのは恥ずかしい限りですが、思い切ってその「製作への道」を次ページ以下にご紹介させて頂くことにしました。拙文ご容赦下さい。

建物模型製作への道

閑谷学校の巻

令和５年５月～令和５年６月

【きっかけ】
前回は法隆寺の模型を作りましたが、それは市販の組み立てキットでした。（その後、同じ組み立てキットを使って、神明造り神社、日本橋も作りました。）　その前には旧自宅のドールハウスを作りました。しかしいずれも寸法が大きく、これらを収納する透明ケースの既製品を入手するのに苦労しましたので、それ以前に作った小型の松下村塾模型程度の大きさに戻りたいと考えていました。
　しかし、これはという建物が思いつかないまま、世の中のコロナ禍のため約 3 年にわたり取材のための遠出をすることができませんでした。幸いにも今年の春以降はコロナ禍が沈静化したので、これを機会に取材旅行に出ることにしました。思い起こせばこれまでいろいろなところに遠出しましたが、それはすべて仕事のための出張でした。仕事を離れ、自費で旅行をするのは初めてといってよいでしょう。自分へのご褒美と考えて決行しました。

【準備】
今年のゴールデンウィーク明けの 5 月 22 日（月）～26 日（金）に 4 泊 5 日で岡山県に出かけました。梅雨入り前の安定した天候に恵まれ幸いでした。岡山市（岡山後楽園、竹下夢二美術館）、倉敷市（美観地区、アイビースクエア、大原美術館）に行きました。また、岡山到着後、岡山駅前の観光案内センターで備中高梁市を紹介されたので、急遽ここにも行きました。山頂にそびえる備中松山城、ふもとの武家屋敷などの素晴らしい名所を巡ることができました。さらに鷲羽山にも行きました。鷲羽山には高校の修学旅行で訪れた記憶があったため、半世紀以上経った今回、再度行ってみました。前回同様の瀬戸内海の豊かな陽光とともに、当時は無かった瀬戸大橋の威容に感動しました。
　さて、倉敷市は戦災を免れたため、市内の美観地区には立派な建物が多く保存されています。大原美術館もその地区内にあります。そこで当初は模型の対象としてこれらの建物を考えていました。しかし旅行前に鳥取県・岡山県アンテナショップ（とっとり・おかやま新橋館）で観光パンフレット[1]を入手する際、係員から「閑谷学校」を勧められました。倉敷美観地区の建物、また、急遽出かけた備中高梁市の松山城と武家屋敷もすばらしかったのですが、備前市に行き「閑谷学校」の実物を見ると、それは建物模型の対象として群を抜いて魅力的でしたので、これを作ることに決めました。
　現地では建物の写真をとり、また園内受付で「閑谷学校資料館図録」[2]を購入し、そこに掲載されていた建物平面図・立面図をもとに設計図を作りました。なお、図 1 は学校とその周辺の地図ですが、今回製作したのはその中央部の□内にある講堂とそれに付随する小斎、習芸斎及び玄関、飲室、石塀と公門のみです。講堂は図 2 のように大きな建物で、これがパンフレット[1]をはじめ、いろいろなところで紹介されています（末尾の【付録】参照）。江戸時代にはここで毎月 1 と 6 の日に教授役によって四書（大学・中庸・論語・孟子）の講釈が行われていました。
　小斎は藩主が臨学したときの休憩所、習芸斎は毎月 3 と 8 の日に読書師による五経（易経・書経・読経・礼記・春秋）や賢伝（賢人の伝記）等の講釈の場です。これにつながる玄関は教官・来賓が使用しました。飲室は生徒の休憩及び喫茶室で、中央には小さな炉があります。
　石塀はかまぼこ形の断面を持つ強固なもので、敷地の周囲にめぐらされています。公門（御成門）は藩主が臨学したときに通った門で、普段は閉められていました。当時の教師や生徒は飲室の前にある飲室門を使っていました。

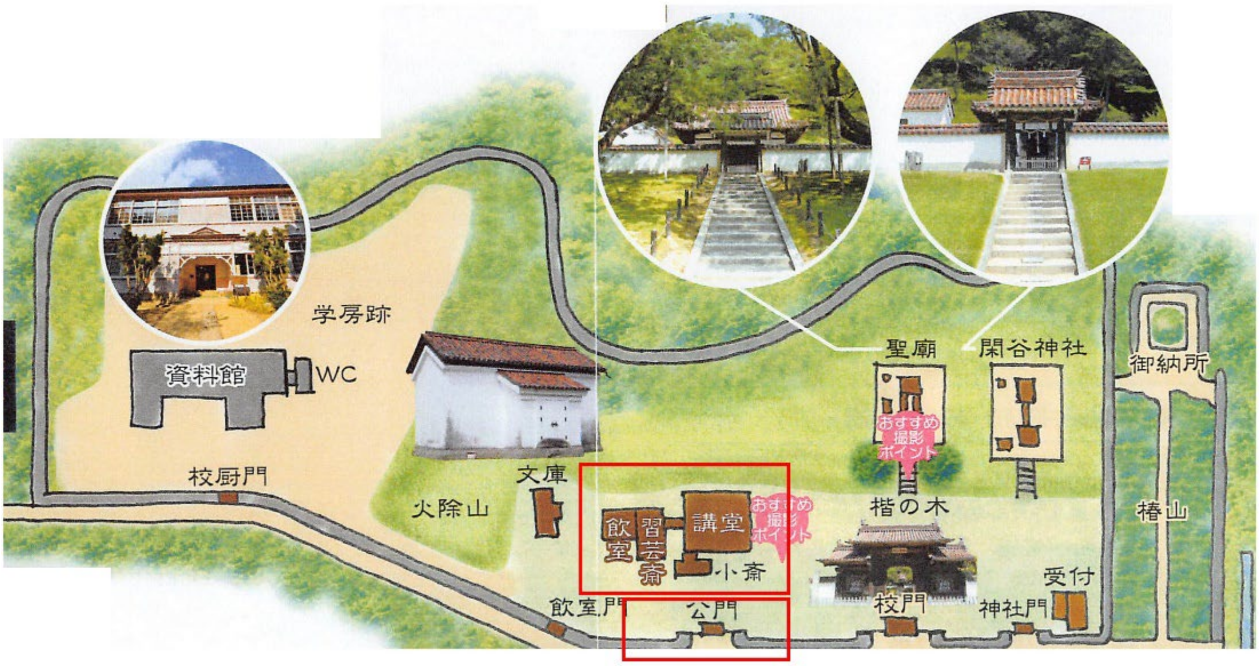

図 1（[1]の 2、3 ページ）

図 2　東面

講堂及び付随建物の平面図を図 3 に示します。この中で講堂部分の床面積は約 15m×19m です。図 1 中の□内の部分の模型を製作し、これを既製品の小型透明ケースに収めるには講堂部分を 85mm×105mm まで縮小する必要がありました。すなわち縮尺率は 1/180 です。これは N ゲージ鉄道模型の 1/150 よりも小さい寸法です。また、高さは立面図（図 4）をもとに 65mm としました。このように小さな模型を作るには設計図の作図及び材料加工の際、高い精度が必要となり苦労しました。それに伴い、細部の出来ばえは必ずしも満足のいくものになりませんでした。適度に大きな模型を作る方が楽です。しかし今回はケースの寸法制限上、小型にせざるを得ませんでした。

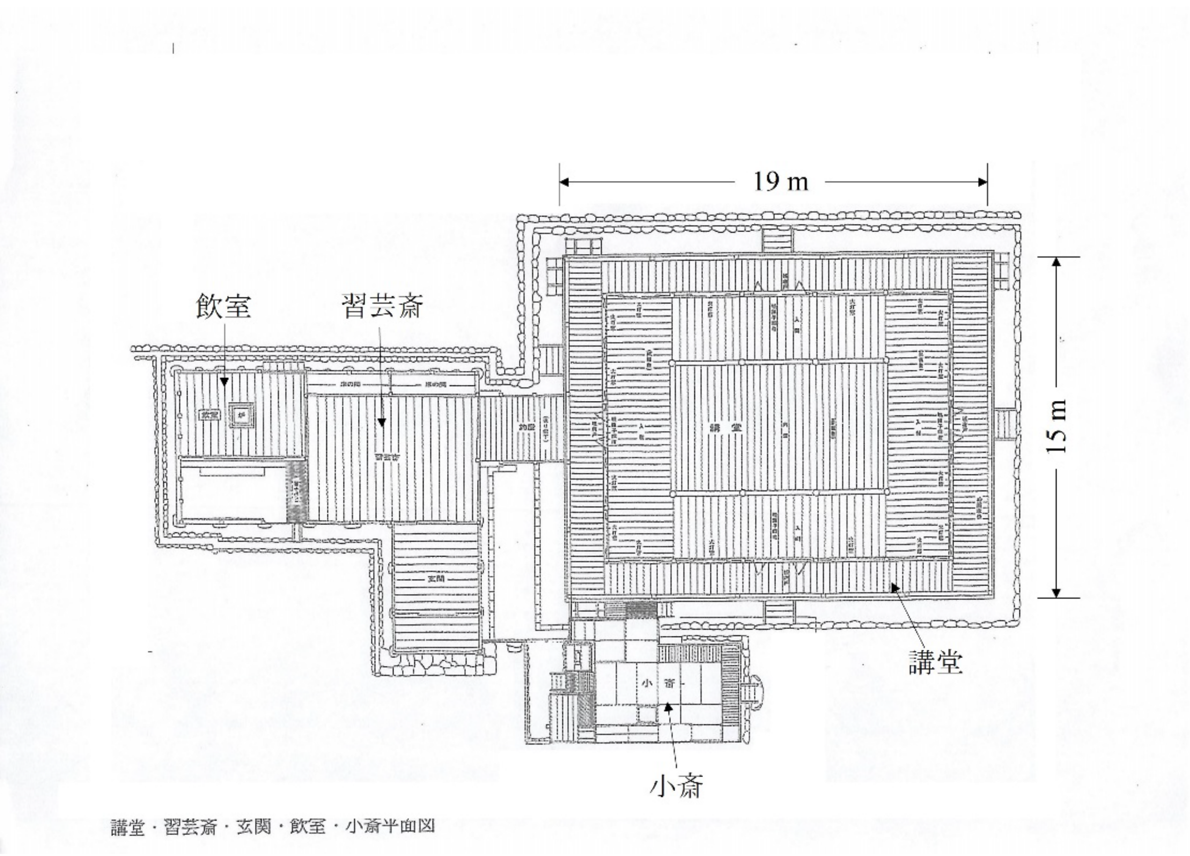

図 3（[2]の 87 ページ）

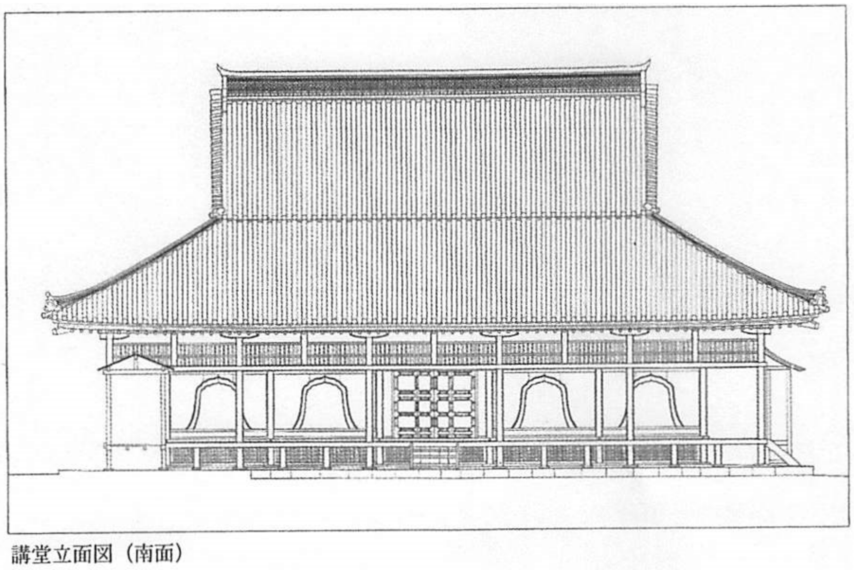

図 4（[2]の 86 ページ）

【模型作り】

［1］ 講堂

まず講堂の模型を作りました。その際に注意すべき点は二つ、すなわち

(1) 欅の丸柱により支えられた講堂中心部（図 5 : 柱、長押、床板など木部は光沢のある拭漆塗仕上げ)、それを取り囲む壁と出入り口、窓、そして最外周の縁側部分からなる木造の三重構造を精度よく作ること。

(2) しころ葺きと呼ばれる二段葺きの屋根（備前焼の瓦を使った本瓦葺き）を精度よく作ること。

設計図の作図には直径 0.2mm のシャープペンシル、高精度のスチール物差しと三角定規を使い作図精度を上げました。

図 5

この設計図をもとにまず方眼紙で予備模型を作りました（図 6）。三重構造なので窮屈な感じです。さらに屋根の予備模型も作りました（図 7）。屋根に反りを持たせるように微細調整し、図 6 の本体に載せて位置調整しました。

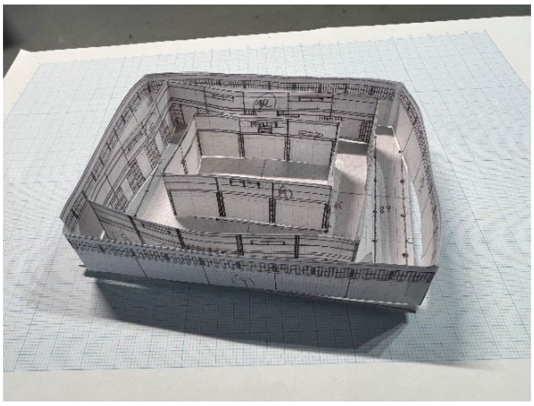

図 6

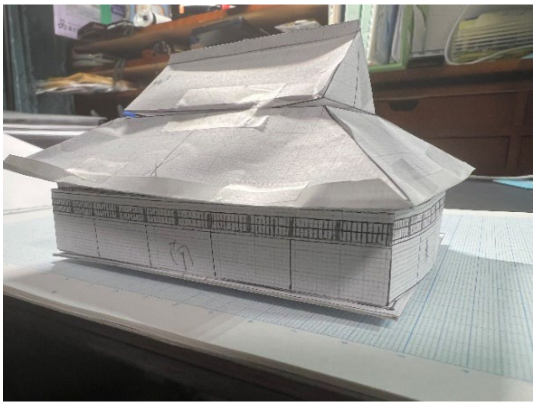

図 7

これらの予備模型を参考にいよいよ各部を作りました。壁部分の素材は色紙、柱は細い丸棒、最外周の梁は細い角材、描線には直径 0.2mm の Steadtler 黒マーカーペンを使いました。図 8～10 は各々講堂中心部、取り囲む壁、最外周の縁側部分です。なお、講堂の内側壁には池田治政の筆による額装の「克明徳」の書のミニチュアを掲げました（図 8）。これらを図 11 のように組み合わせました。このように組み合わせた結果、小型であるため各々の位置の相互関係の精度が十分でないことが少々悔やまれます。床下部分を整備し、昇り石段、そして角の物置などを作って図 12 のように完成しました。

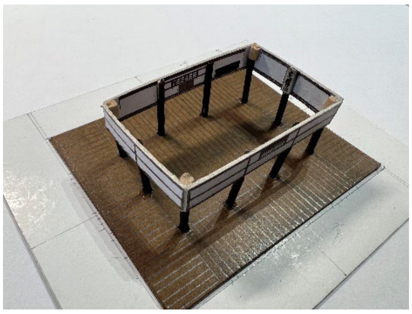
図 8
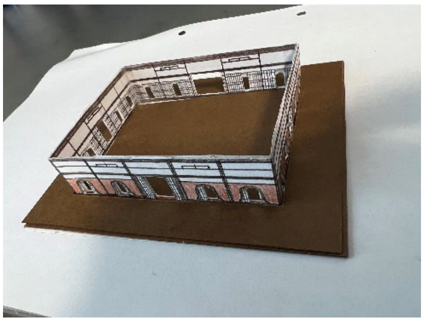
図 9
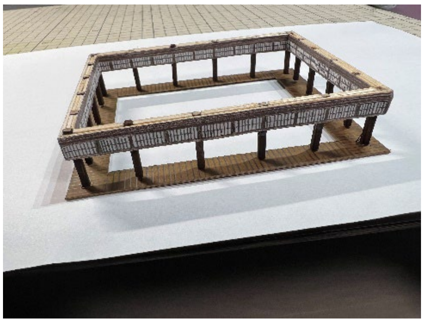
図 10
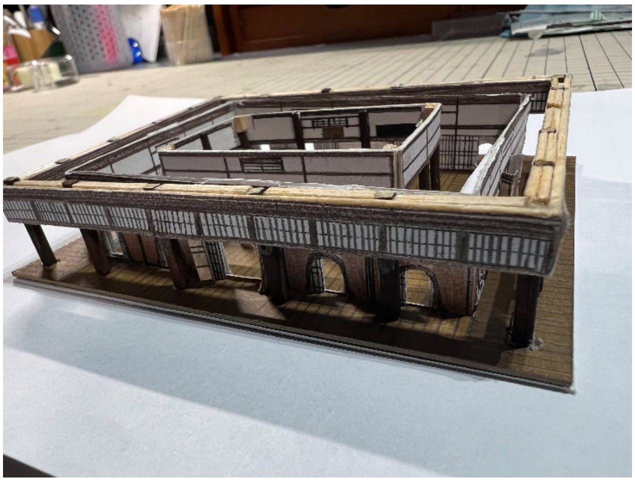
図 11
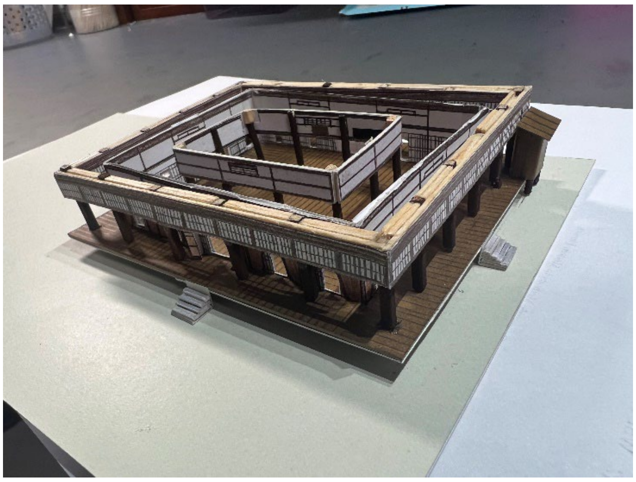
図 12

次に二段葺きの屋根を組み立てました。これには備前焼の瓦の色に合わせた色紙を使い、屋根の反りが出るように工夫して図 13 のように作りました。さらに建物写真からコピーした鬼瓦をつけました。これを図 12 の本体の上に乗せ、図 14 のように完成しました。なお、建物内が見えるように、屋根は取り外し可能としてあります。

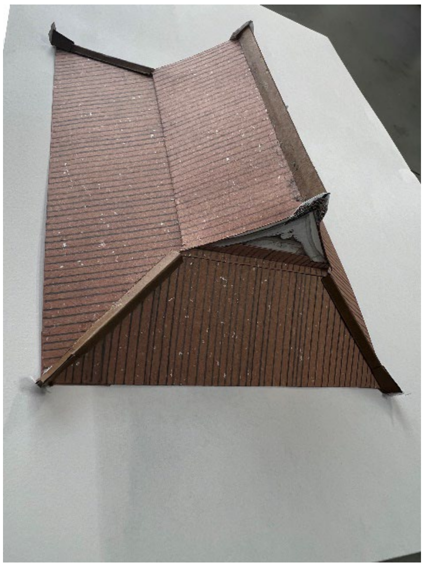
図 13

図 14

［2］小斎

小さい建物なので、一気に作りました（図 15）。講堂側の面には講堂との渡り廊下、庇を付けまし

た（図 16）。

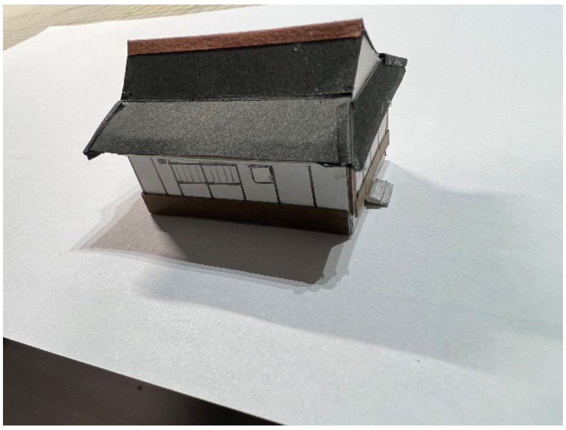

図 15

図 16

[3]習芸斎と飲室

習芸斎と飲室はつながっているので、同時に作りました（図 17）。習芸斎と講堂とをつなぐ渡り廊下も作りました。これらに屋根を乗せて出来上がりです（図 18）。次に習芸斎正面の玄関部分を作り、本体につなげました（図 19、20）。玄関の屋根は習芸斎の屋根に食い込んだ形になっているので、位置と寸法を調整しつつ両者を合体させました。

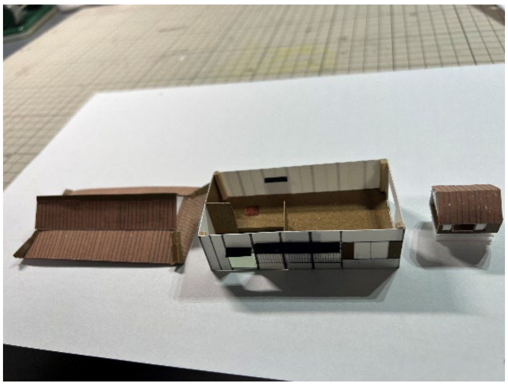

図 17

図 18

図 19

図 20

[4] 建物全体と周囲の調整、石塀と公門

以上で製作した講堂、小斎、習芸斎、飲室の相互位置を調整し、これらをつなげました（図 21、図 22）。小斎、習芸斎、飲室にも鬼瓦を付けました。次に、芝生の雰囲気を表す色紙を敷きました。建物周囲には石を並べました。石塀はかまぼこ形の断面を再現するように作り、それにつながる公

門を作りました。実際の公門は締め切られていましたが、ここでは少し扉を開けました。植木も配置しました。最後に銘鈑をつけて完成しました（図 23～図 26）。

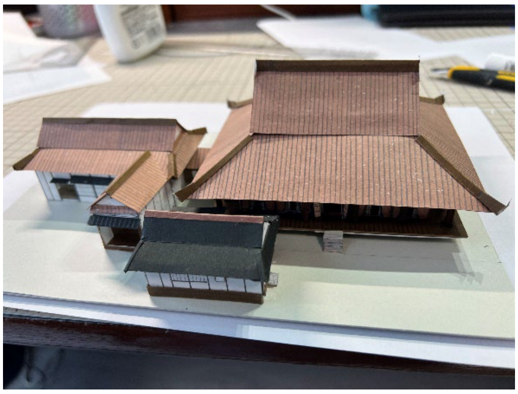

図 21

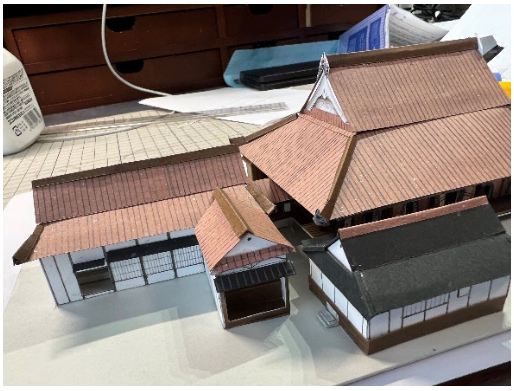

図 22

図 23　南面

図 24　東面

図 25　北面

図 26　西面

【感想】

現地に赴いて閑谷学校の構造を調べ、さらにその由来、建物設計・建設の哲学、それに携わった人たちの人物像に感銘を受けました。これが今回の模型製作に閑谷学校を選んだ主な理由です。寸法が小さすぎたため作るのが容易ではなかったのですが、これまでの製作経験を活かし、何とか完成させました。

今後も閑谷学校のように「優れた物語」をもつ建物の模型を作りたいものです。そのような建物は決して有名な観光地にあるとは限りません。日本の多くの地方にこのような建物があるはずです。そのような建物は独自の評価基準をもって粘り強く探さなくては見つかりませんが、これからもこの探索を続けていきたいと思います。

【付録】閑谷学校と津田永忠

岡山藩主池田光政公は儒学に基づき人を思いやる「仁政」の実現を目指し、閑谷学校（所在地は現在の備前市）を創建しました（寛文 10 年(1670)）。これは庶民のための世界最古の公立学校で、日本遺産の第一号となっています(図 27)。ここで注目すべきは光政公の家臣の津田永忠(1640～1707)です（図 28)。永忠は建設の実務を担い、約 30 年かけて元禄 14 年（1701）に現在とほぼ同様の外観を持つ、堅固で壮麗な閑谷学校を完成させたのです。永忠は建築・土木事業の天才技術者で、今では「岡山のレオナルド・ダ・ビンチ」とも讃えられています。閑谷学校はその外観こそ地味であ

るものの、きらびやかな東の日光東照宮に対し、西の閑谷学校といわれるほど優れた建物です。永忠は「仁政」を実現すべく、「知行合一」(学んだ知識をそのままにせず、良いと思うことは必ず実行する)の考えで建設の実務をまっとうし、建物の完成後もその維持管理に努めました。彼の精神は現代にも受け継がれ、近隣の学校の生徒たちが多く見学に来ています。彼らはまず建物中央部にある講堂で孔子の教えを学び、その後には皆で講堂の床の雑巾がけをして建物の保全体験をします。

なお、永忠は閑谷学校の他にも、岡山後楽園作庭を指揮し、干拓事業などの多数の公共事業を手がけました。岡山藩の、そして現在の岡山県の基礎を作り上げた偉人です。岡山後楽園内に「津田永忠遺績碑」が建てられました(明治 29 年(1896))(図 29、30)。

図 27 パンフレット表紙([1]の表紙)

図 28 津田永忠像([1]の 2 ページ)

図 29 津田永忠遺績碑

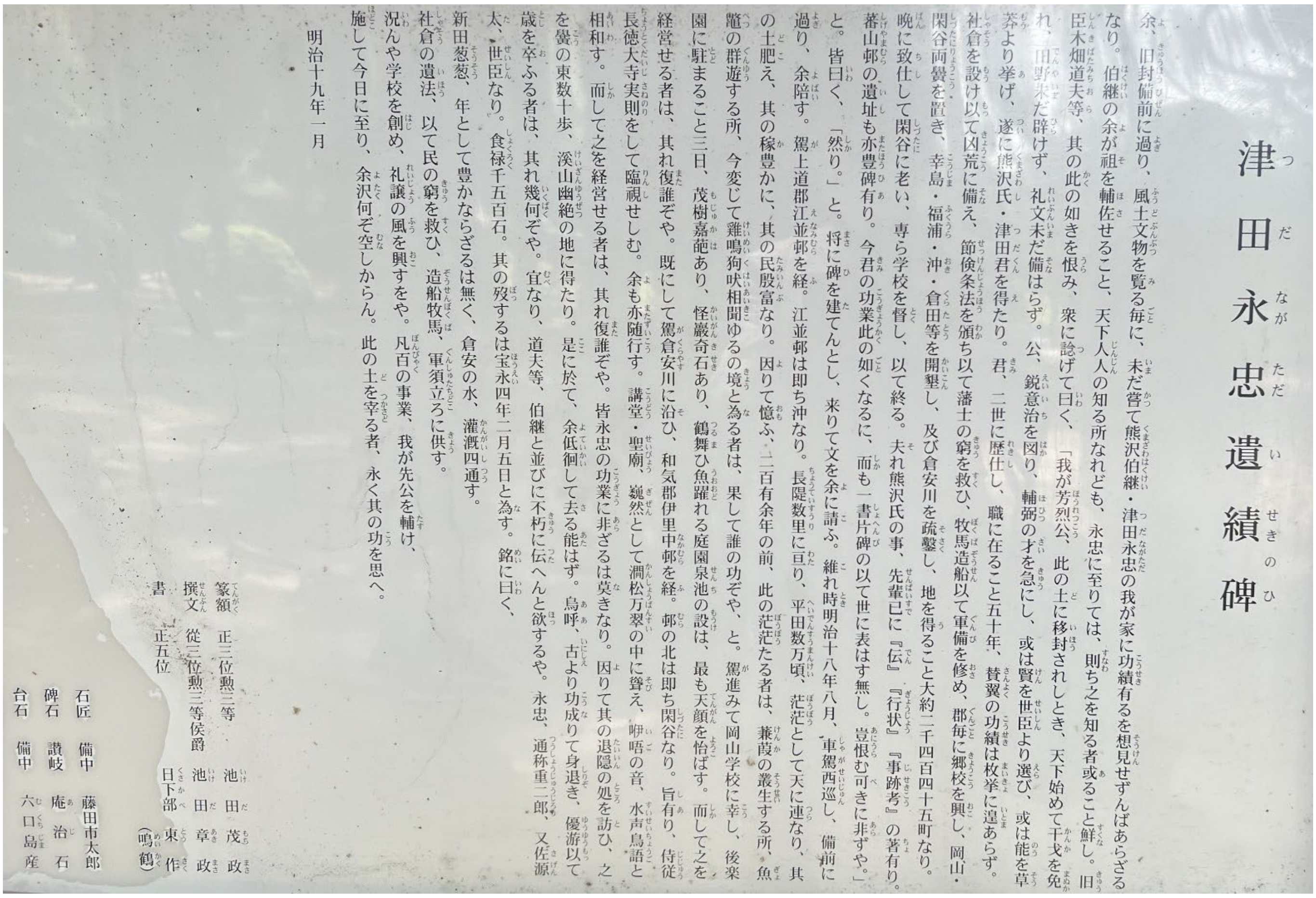

図 30 津田永忠遺績碑の説明パネル

参考文献

[1] パンフレット「旧閑谷学校」〔(一社) 備前観光協会、2022 年 11 月〕

[2]「閑谷学校資料館図録」〔特別史跡旧閑谷学校顕彰保存会、平成 12 年 10 月)〕